

2024年1月から12月の研究活動報告

卒業生、在校生と「フリースタイルの継承 久松真一図書資料展」(2024年1～3月)を図書館で実施。本展は、岐阜県図書館と附属図書館が所蔵する図書資料を活かすと共に、久松真一記念館(岐阜市長良)との対話を通じて、日常に継承されるその思想に注目した。言い換えれば、学説的な検証に留まらず、むしろ岐阜市長良の旧家、旧宅の生活誌という性格から、久松家を主題とした。記念館は真一を哲学者として顕彰する一方、他方では生活者としての佇まいを継承している。そのように意識させる要因は、記念館館長である久松定昭氏の生活者としての感覚に基づく。旧家を継承し、旧宅を維持するその方針は、真一の生きた時間の凍結でなく、むしろ現在への溶解として見出されていた。この生活感覚の流動性こそが、真一の思想の継承であり、リアリゼーションに他ならない。このことは、真一が道場の名前にも用いた「FAS」、すなわち「Formless self / 形なき自己」「All mankind / 全人類」「Superhistorical history / 歴史を越えた歴史」に通じる。真一の哲学に基づく記念館の姿を、本展では「フリースタイルの継承」と題した。

「清流の国ぎふ」文化祭2024「DX時代のメディア表現——新しい日常から芸術を思考する」(2024年11月)と題して、DX=デジタル・トランスフォーメーションの将来を主題にした展覧会を実施。本展ではこの主題に対して、ふたつの原点から思考した。ひとつはインターネットに象徴されるメディア技術の原点。もうひとつはIAMASが所在するソフトピアジャパンの想像力の原点。ふたつの原点の象徴として展示した作品が、世界的なメディア・アーティストの藤幡正樹(東京芸術大学名誉教授)の作品《Light on the Net》。1996年にソフトピアジャパンと藤幡氏の共同研究で制作された本作は、物理的な照明装置の筐体とWEBサイトから構成される作品で、現代アートの美術史において、インターネットを活用したアート作品の嚆矢と位置づけられている。光の明滅による非言語的なコミュニケーションから、間合いや、接触を通じた現在のDXでは省かれがちな体験が自覚された。この他にも絵画、有線放送、ラジオ、時報といったオールドメディアを主題としながら、デジタルによる表現を凝らした作品で、メディア技術の温故知新を問いかけた。

昨年度の研究活動を通じて、磯崎新(1931～1922年)に関する調査

と研究において新たな論点を見出し、これを基にした研究計画、
「「間展」の間、磯崎新の間——ポストモダニズムの美学を再考する」科学研究費助成事業基盤研究C（2024年4月 - 2029年3月予定）
を取得した。本研究計画の主眼は、磯崎の後半生に展開した「間」
に関する思想の展開を追う前に、1978年にパリで組織され1981年ま
で巡回した展覧会としての「Exposition MA Espace-Temps au Japon
（間展 日本時間／空間）」を明らかにすることだ。言い換えれば、
戦後日本美術を活かした国際展としての側面からこれを分析する
点にユニークがある。研究計画に基づき、初年度は、間展が開催
されたパリ装飾美術館の会場の調査を実施した（2024年9月）。
研究計画書を作成した段階での研究成果と、この調査を反映して、
「間展再考 —— 戦後日本美術による伝統美学の脱構築とキッチュ
化」を第75回美学会全国大会（大阪大学、2024年10月14日）で発表
した。発表要旨は以下の通り。

間展の意義は、ポストモダニズムの実践としてキュレーションが評
価されたことが大きい。特にロラン・バルトやジャック・デリダの
評にこれが顕著である。しかしながら間展の評価をないがしろに、
その後の「間」の言説が同一視されている。本発表では、磯崎自身
を論じる方法論を提示した上で、その国際的な評価の起点となった
1978年の間展という「展覧会」の意義を、ポストモダニズムの実践
として検討、分析した。間展はプロローグ、道行、数寄、闇、神
籬、橋、移、寂、エピローグの九つの部屋から構成された展覧会
だ。ジョセフ・コーススの《One and Three Chairs》を参照し、各部
屋にはSubject、Object、Imageが並置された。Subjectとして、磯崎に
よる伝統美学に関する説明文が提示。Objectとして、倉俣史朗、宮
脇愛子、高松次郎らの現代美術、あるいは茶室、能舞台、伊勢神宮
などの模型。Imageとしては、篠山紀信、山田脩二らの写真、磯崎に
よる廃墟のコラージュ、伝統的な図像。これらの会場構成によっ
て、東洋的な時空間概念、戦後日本美術、伝統美学を対峙し、磯崎
の原風景の時空間「一九四五年八月一五日」の脱構築とキッチュ化
をはかった。バルトによる展評（『ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』
誌、1978年10月23日号）の解釈を通じてこれを説明した。

「坂本龍一 | 音を視る 時を聴く」（東京都現代美術館、2024年12
月～25年3月）のアーカイブ展示監修を担当。自著『坂本龍一のメデ
ィア・パフォーマンス マス・メディアの中の芸術家』をコンセプトに、
昨年度開催した「TOKYO MELODY1984 坂本龍一図書資料
展」（IAMAS附属図書館）を元に展示構成した。

他にArt of listeningプロジェクトの活動、各授業、担当学生の指導、各委員会の委員を務めた。

[口頭発表]

・「間展再考 —— 戦後日本美術による伝統美学の脱構築とキッチュ化」第75回美学会全国大会 2024年10月14日

[論文]

・「ドアの向こうで、迷走がつづく。 安部公房と磯崎新の「砂漠の思想」序説」『現代思想』52(15) 257-267、2024年11月臨時増刊号

・「抵抗記念碑としての習作（こそを作品とせよ）」『クワクポリョウタ《コレクションネット》』（展覧会カタログ）56-59 2024年2月

・「妹島和世を語る磯崎新——『日本建築思想史』を読む」『思想』(1197) 48-61 2024年1月



[MISC]

・「大岩オスカル『はじめてアート』の魅力。」『美術手帖web』2024年11月7日

・「インターネットに「間」を探る 藤幡正樹《Light on the Net》 岐阜県大垣市ソフトピアジャパンの先取の精神」『OKB REPORT2024』(195) 27-30、2024年10月

・「哲学者・久松真一の系譜 岐阜に息づくフリースタイルの思想」『OKB REPORT2024』(194) 39-42、2024年7月

・「芸術という独学に学べ！「アイデンティティの空白」を描く方法」（書評：森村泰昌『生き延びるために芸術は必要か』）『週刊読書人』(3545)、2024年6月28日

・「「無」の可能性と不可能性の「祝祭」——日本のオリジンへの問いかけ、そしてイランへ」（書評：安藤礼二『死者たちへの捧げもの』）『週刊読書人』(3536)、2024年4月19日

・「登るように読み、書くように登る——エクリチュールに基づく、風景の創造」（書評：石川美子『山と言葉のあいだ』）『週刊読書人』(3525)、2024年2月2日